

昆布と富山売薬商 — 北前船が運んだ倒幕のエネルギー —

池本 正純

<プロローグ>

1. 越中富山の薬売り
 - 1) 廣貴堂
 - 2) 江戸時代の富山売薬商
 - 3) 越中売薬商薩摩組
2. 江戸後期の薩摩藩
 - 1) 薩摩藩の琉球口貿易
 - 2) 借財五百万両と調所広郷笑左衛門
 - 3) 黒砂糖専売制
 - 4) 藩営商船の建造と海商の出現
 - 5) 密貿易の拡大
3. 昆布ロード
 - 1) 薩摩船の難破
 - 2) 松前昆布と唐物業種
 - 3) 売薬商と薩摩藩との結びつき
 - 4) 雇船から北前船船主へ
 - 5) 幕末・明治に向かって

<エピローグ>

<プロローグ>

今回の調査(北前船の足跡をたどる Part3—北陸編—)の集合場所は9月2日午前にも新潟駅であった。朝早くに出るのはつらいので、新潟に前泊することにし、その夜地元出身のゼミ卒業生(1988年卒)と久しぶりに会うことになった。彼の奥さんまで一緒だった。話が弾み、酒が進んだ。いい気分ホテルに帰り、何気なくテレビをつけると、地元の番組で偶然富山が話題になっていた。これから行く場所である。「富山は昆布の消費量が全国一」「富山には昆布締め

を始め昆布料理が多い。おにぎりは海苔でなく、とろろ昆布で巻く。」「昆布を売る店に四十物屋（あいものや）という名前がある。」「あいもの（相物、間物とも書く）とは、生ものでもなく乾物でもないその間の意味で、それが四十種類あるのでその表記がある。」「明治時代、富山から北海道、とくに羅臼地域に移り住んだ人が多い。」そんな説明があった。どれも初耳である。知らなかったことばかりだ。やがて高岡のある昆布屋が画面で紹介された。すぐにその店の名前をメモに取った。高岡もこれから行く予定の町である。

メモを取ったのには理由がある。妻から、「もう昆布がなくなってきたので、どこか出かけた先で昆布の良いのがあったら買ってきて欲しい」と言われていたからである。妻のお気に入りには、函館の自由市場で私が手に入れた昆布である。いい昆布を仕入れている仲卸がある。店の婆さんとはすでに顔馴染みである。「函館の彼女に会いに行く機会はないの？」と最近言われ続けていた。今回、高岡で良い昆布が買えるのなら、それに越したことはないと思った。

高岡に宿泊した際、ホテルでその昆布屋の場所を聞いてみた。ホームページを調べてくれ、朝7時半に店は開くとのこと。それほど離れていない。出発は9時だから充分間に合う。食事を終えてすぐタクシーを飛ばして行ってみた。ところが店は閉まっている。運転手に促されて電話を入れてみた。なかなか出なかったがやっと出た。眠そうな声で、7時半は親父の代までで、今は8時半からしか開けていないという。瞬間、「やる気ないな」と感じたが、せっかく来たのだからと思い、東京から来た、テレビで見た、買って帰りたいと告げた。しょうが無さそうに渋々店を開けてくれた。若い店主であった。独り者と見た。

言い訳のように、「今昆布が採れないんですよ」と言った。壁には昆布のいろんな種類を説明した大きな写真パネルを貼っただけで、羅臼昆布しかなかった。店舗の片隅に、とろろ昆布を削る作業場が見えた。時間のある時に削るのだという。きっと親父さんはいい職人だったに違いない。親父さんが急に亡くなって息子が仕方なく跡を継いだのだろう。商売っ気のなさにそんなことをつい想像した。酢を入れた大きな壺は作業場の床の下にあった。この特殊な包丁はどこから手に入れるのかと問うと、メンテナンスを含め大阪の堺だという。堺は古くから刃物の町でもあり、とろろ昆布製造の本場でもある。社研でもかつて見学に行ったことがある。

面白かったのは、昆布を小さく2センチ四方に刻んだものが、百グラムぐらいずつ小さなビニール袋に入れて店の棚に並べられていたことである。棚のかなりのスペースをそれが占めている。「これどうするの？」と聞いたら、「食べるんですよ。酒のつまみやおやつとして。」と応えた。よく売れるという。やっぱり富山の人は昆布好きなのだと思えた。

じつは、この調査旅行の最後、解散場所である金沢駅でも、別のゼミ卒業生（1992年卒）と会う約束をしていた。西口でバスを降りて間もなく彼に会えた。早速、魚の美味しい店に入り、今回の調査の話、佐渡・富山・高岡に行ってきたこと、そして昆布屋に寄ってきたことも告げ

た。彼が言った。「そうなんですよね。あの（富山の）人たち、どんなに新鮮な魚も必ず昆布で締めるんですよ。」同じ北陸の隣の県である。加賀藩が宗藩、富山藩は支藩。藩主は前田家の親戚同士。それなのに食文化が違うと言いたげであった。そんな表現をするほどに、富山での昆布の珍重の仕方は半端ではない。

富山に昆布は取れない。それにも関わらず、富山になぜ昆布を愛する食文化が根付いているのか謎だった。その謎を解く鍵が富山の売薬商と北前船であった。

北前船と売薬商との間には切っても切れない仲があった。また、江戸時代、北前船が松前から昆布を全国に運んだであろうことは容易に想像がつくが、じつは南の果て薩摩が昆布を特別に必要としていたのである。琉球を通じて中国への朝貢貿易に用いるためである。その入手に富山売薬商が一役買っていたという。その見返りは中国の薬種の入手である。富山は「昆布ロード」という国際的な交易ルートの要であったのだ。廣貫堂資料館の一枚のパネルからそのことが次第にわかってきた。

1. 越中富山の薬売り

1) 廣貫堂

今回の調査で、富山市にある廣貫堂資料館を訪れた。廣貫堂は、江戸時代からの越中富山の薬売りの流れを組む薬屋である。そこで富山の薬売りの歴史を聞いた。

富山藩二代目藩主前田正甫（まえだまさとし）公は、薬にたいへん関心の深い、研究心旺盛なお殿様でした。たまたま、正甫公が腹痛のおり、備前岡山藩の藩医万代常閑（もずじょうかん）がつくった“反魂丹”（はんごんたん）を飲んだところ、とても効き目があり常備薬としてもっていました。元禄3年（1690）のある日、江戸城内で突然の腹痛に苦しむ三春（みはる）藩主（福島県）を、正甫公がもっていた反魂丹で救いました。この話が各地の大名に伝わり“ぜひ、我が藩にもこの薬を分けて欲しい”と諸大名が願い出しました。さっそく、正甫公は備前岡山藩から万代常閑を招き、薬御用達（くすりごようたし）松井屋源右衛門に命じ反魂丹を作らせました。この事件をきっかけに、富山の薬は全国に知れ渡り、発展していくことになります。（廣貫堂資料館展示パネル「富山の薬の始まり」）

「用を先にし利を後にし、医療の仁恵に浴せざる寒村僻地にまで広く救療の志を貫通せよ」という正甫公の理念は現代まで受け継がれ、富山の売薬業の基本理念となっています。

富山の薬が全国に広まるに従い、富山藩は、配置員の保護と育成にも力を注ぎます。明和2年（1765）六代藩主利興（としとも）公が反魂丹役所を設立し、配置員の身分証明、製薬の指導、懸場帳（かけばちょう）の整備など行い、富山の売薬業の発展に努めました。（〔5〕 廣貫堂のあゆみ）

先に薬を預けておいて、後から利用した分だけの代金をいただき、新しい薬を補充するという「先用後利（せんようこうり）」は、「用を先にし利を後に」という正甫公の理念が反映されたビジネスモデルで、富山のくすりならではの販売手法。薬の効能と相まって、富山の配置薬は全国に販路を広げていきます。（〔5〕 廣貫堂のあゆみ）

ちなみに、「先用後利」は英語で、Use First, Pay Later. というそうである。うまい翻訳である。（廣貫堂資料館での話）

薬の販売データは「懸場帳」と呼ばれる帳面に記載されました。配置員が配置先に預けた薬の種類、数、服用高はもちろん、お得意先の家族構成や健康状態など様々な情報が書き込まれた、いわば江戸時代の顧客データベース。お得意先の情報満載の懸場帳は、それだけで貴重な財産価値を持つほどになったと言われています。（〔5〕 廣貫堂のあゆみ）

明治になって、富山の薬は重大な転機を迎える。和漢薬よりも洋薬を優先する考え方が強まったからである。資料館の説明係は、「ある種の廃仏毀釈」だと表現した。その通りだと思った。西洋かぶれの掌返し、劣等意識の裏返し、「糞に懲りて膾を吹く」の類いである。

明治初年には、富山藩は百種を超える薬を取り扱っていましたが、廃藩置県により反魂丹役所がなくなり、大きな転換点を迎えます。新政府は、国内の医療業界を国家統制のもとにおくため、売薬規制法を制定し、漢方売薬を廃止に追い込みます。富山売薬の最大の危機を乗り越えるため、売薬業者たちはそれぞれの資金と知識を合わせて、「売薬結社廣貫堂」を発足させます。（〔5〕 廣貫堂のあゆみ）

300の売薬業が集まり、共同で製薬会社廣貫堂を設立したのは、明治9年（1876）である。政府の規制に対応していくためには、バラバラで対応していくのは難しいという判断である。西洋の製薬法も取り入れ、品質向上を図ることによって社会の信頼をつなぎとめていったのである。

廣貫堂という社名は、前田正甫公の「広く救療の志を貫通せよ」の訓示に由来すると伝えられています。また、廣貫堂のマークである「ふくら雀」は、旧富山藩反魂丹役所にちなんでつくられたものです。日々の健康のため、なくてはならない家庭用配置薬が、日本全国に羽ばたく雀のようにすみずみまで押し広げられるようにとの願いが込められています。（〔5〕廣貫堂のあゆみ）

戦後間もなくの昭和20～30年代に、富山の売薬業は最盛期を迎える。現在は、配置薬生産の比重は下がり、大手医薬品メーカーからの委託生産に重心は移ったという。富山では、製薬・売薬を支える周辺産業として、包装、製紙、木工、金工、焼物、印刷、薬種商、運搬業などが発達した。とくに富山では「ラッピング」に関わる産業の発達に特徴があるという。薬売りの伝統の副産物である。（廣貫堂資料館での話、〔6〕売薬資料館）

私にとっての薬売りの思い出は、柳行李と紙風船である。柳行李を背負った薬屋さんが訪ねて来ると、古い薬と新しい薬とを入れ替え記帳し終えるまでそばを離れず、行李の中からお土産の紙風船を出してくれるのをじっと待った。

売薬さんは、お得意さんを回るとき必ずお土産品をもって行きました。娯楽の少なかった昔のこと、お得意さんはいつも「紙風船」や「絵紙（えがみ）」を心待ちにしていました。「紙風船」は、子供たちへのお土産としてとても人気がありました。また、「絵紙」は「売薬版画」ともよばれ、江戸浮世絵版画の影響を受け歌舞伎役者などが色華やかに擦り上げられています。売薬さんは薬のほかに庶民の娯楽や情報も運んでいたのです。（廣貫堂資料館展示パネル「お得意さんへのお土産品」—明治・大正・昭和—）

昔から柳行李を背負った薬屋さんの姿は永いあいだ人びとに親しまれてきました。柳行李は、材質や中身の組み合わせに工夫が凝らされ、一番上に「懸場帳」「算盤」「筆記具」「財布」など商売の道具、二段目にはお得意先へのお土産品、三段目には引き揚げてきた薬、四、五段目には新しい薬が収められていました。今ではトランクやアタッシュケースに代わり、お得意先を「家庭薬配置員」が訪問しています。（同上「薬やさんと柳行李」）

柳行李は4段あるいは5段重ねだが、下から上にいくに従って、四角い口の面積は小さくなっている。重ねやすいように工夫してあるのである。一番上に入れる筆記用具は、江戸時代、矢立（やたて）であった。

2) 江戸時代の富山売薬商

江戸時代、諸国への出入りが厳しく制限されていたにも関わらず、富山の売薬商たちが各地を行き来できたのには、江戸城内で突然腹痛に襲われた大名に富山藩主前田正甫が、印籠に所持していた薬を与えてたちまち快癒し、以来各国大名から薬を求められるようになったという事情がある。富山藩薬御用達であった松井屋源右衛門が売薬行商を始めたと言われる。江戸中期以降、富山売薬の販路が全国的に広がった。富山藩は中心的産業として売薬を奨励し、税を納める仕組みを作って統制した。反魂丹役所が設置されたのは江戸中期である。

売薬人は商売に出かけていくそれぞれの国ごとに仲間組織（組）を作り、「示談（じだん）」と呼ばれる守るべき取り決めを定め、互いに協力する体制を作っていった。越中組、関東組、五畿内組などがあり、文政年間（1818～29）には北海道の松前藩内で商いが始められていたという記録が残っている。安政年間（1854～59）には、松前藩以外での蝦夷地で新しく売薬を始めたいという願い書も出ている。北海道は、青森・岩手とともに「南部組」に含まれる。江戸時代末期には全部で22組、売薬商も2,258人を数えた。（〔6〕売薬資料館）

売薬商はじつは富山以外にも存在する。隣接する加賀藩（石川）でも江戸期から売薬業は存在した。他の地域では、大和売薬（奈良）、甲賀売薬・日野売薬（滋賀）、伊佐売薬（山口）、田代売薬・鹿島売薬（佐賀）などがあった。（〔6〕売薬資料館）

ちなみに、時代小説の中に次のような記述がある。

「売薬といえば、越中富山の専売特許と見られがちだが、同じ越中でも加賀藩領の水橋浦、東岩瀬、滑川（なめりかわ）などでもさかんに行われていた。」（鳴海〔4〕pp.24～25）

「水橋浦は加賀藩の飛び領だが、富山藩領と接しており、昔から売薬商売の盛んな地域である。」（〔4〕p.509）

富山売薬は商いの地域が最も広く、長期間にわたって続けられてきたので、よく知られるようになったという。藩として組織的に展開していたのである。（〔6〕売薬資料館）

この時代小説のなかに、富山売薬の古い起源として立山信仰の修験道とのつながりがあるとの指摘がある。興味深い点である。

「富山売薬と、修験業者たちが広めた立山信仰との因縁は深い。先用後利（せんようこうり）という富山売薬商独自の商法も、もともとは布教活動にあたった修験業者たちが信者たちの家々をまわった際、経帷子（きょうかたびら）や魔除けの札を置いていき、翌年再訪したときに使った分だけ金をとったことに原型があるとされている。また、医薬品の調合についても修験業者たちが編みだした製法が伝承されたともいわれていた。立山信仰を広めるため、修験業者たちは民衆の肝を奪う秘蹟を見せなければならなかった。医術も秘蹟の一つにすぎない。」

(鳴海 [4] p.74)

「富山の売薬商売は、そもそも立山信仰の修験者たちが行った布教活動が発祥と言われる。修験者たちは、信仰を広めるため、熊の胆や硫黄など土産物を信者に配ったが、売薬商たちも古くから得意先へ土産を持っていくのを習いとした。時代を経るにつれ、売薬商の土産物は立山信仰と関わりなく客に喜ばれる富山の特産品などが中心となったが、この頃（江戸末期）では売薬版画と呼ばれる絵紙が多くなっている。図柄は人気の高い歌舞伎役者や七福神など見栄えのする者、めでたいものが多く、かろうじて仏教画の絵紙に立山信仰の名残があった。」(鳴海 [4] p.95)

山奥で修行する修験者たちの中から、やがて忍びの術を能くする者たちの系流が生まれ、中には売薬人として働いている者もいた、という想像力溢れるロマンがこの時代小説の通奏低音として流れている。そして、売薬人＝忍び（商品経済の代理人）VS 剣豪（幕藩体制の代理人）という舞台設定が、剣豪時代小説としての色付けとなっている。剣に対する忍びの武器は、硬い鋼（はがね）の筒の中に仕込んだ矢立である。取り出しやすいように柳行李の一番上に潜ませてある。

3) 越中売薬商薩摩組

売薬商たちが全国を移動する手段は、北前船であった。北前船は荷物とともに人も運んだのである。売薬商たちの地元富山は、また北前船船主たちの地元の一つでもあった。

「売薬人が越中の国を出掛ける時から薬行李を背負うのではなく、売薬人は物資の集散する津港地域までは北前船に乗り、薬は薬荷として積載品目録に登録記載される積荷であった。日本海を自在に航行した北前船が越中売薬の背後に存在していたのである。そして、北前船の航跡、即ち北の松前から西廻り航路沿いの各地に至る領域経済圏が成立していた。」(徳永 [2] p.106)

「越中売薬人が行商の対象とした領域は全国に及んでいた。彼らの活動領域の拡大に北前船が一役かっていたことは、北前船の正規の搬入航路である西廻り航路以外に、越中と薩摩を結ぶ航路があったことを意味する。」(徳永 [2] p.107) 薩摩にも越中売薬人が行商に訪れていたということは、北前船が薩摩にも通う特別なルートが存在したということである。

薩摩組はその名の通り薩摩国で行商をする売薬商たちの組織である。

「富山売薬商人は全国をくまなく歩き行商していた。薩摩藩領内では天明年間（1781～1789）以前から行商を許されていて、薩摩組という組織が出来上がっていた。国分、敷根、ベニヶ外城は能登屋兵右衛門が担当し、鹿児島城下、上町組、下町組、西田町組は宮島屋専十郎が担当していた。このように、薩摩、大隈、日向を細かく 26 地区に分けて延べ 26 人の者に担当させ

ていた。」薩摩藩における富山の行商の責任者は国分方面を担当している能登屋兵右衛門であった。(大明寺 [1] pp.56-57)

薩摩の地は地理的位置において辺境の地であり、また藩そのものも最も閉鎖的な領域である。当時の薩摩藩は、富山の売薬人にとってまさに逆境の地であった。幕府が鎖国政策を取る中で、薩摩藩自身も他藩の出入りを厳しく監視する「二重鎖国」の状態だった。「封建社会の江戸時代、幕末とはいえ商品流通を促進する行為は、自給体制を前提とする封建制社会にとっては存亡の根幹に関わる問題であった。薩摩藩にとっても同様であり、領内での商品経済の発展は抑制しなければならないのはいうまでもない。」(徳永 [2] p.107) 外部の商人が領地内で商売をし、売り上げ代金(貨幣)を領外に持ち出すことは極力避けなければならない。いや、領地内でも商品経済(貨幣取引)自体を極力抑え込まなければならないのである。

それに加えて、薩摩藩は浄土真宗を禁教としていた。一方、富山は「真宗王国」と呼ばれるほど真宗の信仰が盛んな国柄である。売薬人に対し薩摩藩が神経を尖らせるのはいうまでもない。「薩摩藩領で浄土真宗と知られると薬は没収され営業停止になりますから、売薬人たちはく八尾(やつお) > という富山南部の地名を使い、そこから来たと偽って商売をしていました。越中とは名乗っても、富山とは名乗れなかったのです。」([8] 6/12)

薩摩組による藩内での行動には藩独自の厳しい規定を適用し管理統制を強化することで、商品経済の弊害をできるだけ抑え込んだ。また、薩摩組が守るべき掟(「示談」という仲間内自主規制)の中で極めて重要なものに、真宗のことには一切触れないことという一項が入れられていた。(徳永 [2] pp.107-109)

ここまで用心深くしてまで、さらには、藩の基本政策(商品経済の排除)に矛盾してまで、薩摩藩は越中売薬の認可をしたのである。他の藩の行商人はいっさい入れていない。逆から見ると、越中売薬商は、そこまで行動の制約が多いにもかかわらず、厚い壁を乗り越えて薩摩に行商人として入り込んだのである。両者をそこまで結びつけたのは何だったのか。

2. 江戸後期の薩摩藩

1) 薩摩藩の琉球口貿易

幕府の鎖国体制とは、経済的には、長崎に交易の場を限定した貿易独占体制である。長崎会所に交易の権利を得た商人たちが利益を得るのであるが、幕府はそこから運上金を手に入れる。利益がより大きいと思えば、幕府自身も貿易に手を出す。独占するために、出入り口(取引の場)を限定し、交易する品物を専売(禁制品)としたのである。

薩摩はそのような時代にあって特異な立場にあった。

「幕府の鎖国政策のなかで朝鮮口（宗氏）・琉球口（島津氏）・松前口（蠣崎氏）が長崎港に準ずる開港地であり、なかでも特筆すべきは南九州の薩摩藩が琉球を支配し、琉球は琉球国として宗主国中国に朝貢する侯国であったことから、薩摩藩は間接的に日本で唯一、中国を中心とする東アジア世界に繋がっていたといえる。」（徳永〔2〕 p.3）

「幕府が鎖国的な政策をとる中で薩摩藩に琉球口貿易を許可した結果、『幕府の鎖国は、薩摩藩の開国』といえるように、幕藩体制下にありながら中国への朝貢貿易に直結する特異地域となったのである。」（徳永〔2〕 pp.3-4）

鎖国の中で、薩摩藩は、琉球を通じて開いている交易の出入り口を最大限に利用しようとした。その結果、朝貢貿易品の俵物（煎海鼠・干鮑・鱧鱈）や昆布の調達では幕府の長崎港貿易との競合を深め、中国からの下賜品の国内販売では唐物（からもの）販売を請け負う中国商人と競合することになった。（徳永〔2〕 p.4）

たとえば、越後の俵物請負人からの情報では、松前産の俵物を新潟の海老江（今の村上市）あたりで密買し、ときには薩摩の船が松前に直接買い付けに来ることもあったという。「幕府による俵物独占集荷体制への密買の割り込みは、公的な長崎口貿易の俵物主要産地である北国筋俵物の長崎会所（俵物役所）の仕入れを・・・困難にさせた」のである。長崎会所に回る俵物の量は減り続け、しかも品質が落ちたのである。（徳永〔2〕 p.103）また、中国商人からも、琉球の進貢貿易で手に入れたと思われる唐物（中国からの輸入品）が長崎会所を通じて多数売り捌かれていること、薩摩藩の琉球渡しの俵物の品質が良く、それが中国に広く出回っていることなど、薩摩によると思われる俵物抜け荷の弊害（長崎で貿易に携わっている中国商人にとって商売にならず大変迷惑なこと）が訴えられている。幕府には取り締まってほしいということである。

幕府も薩摩藩の密売買のことは勘づいており、天明5年（1785）に一つの策を打つ。

「俵物一手請方商人を廃止し、長崎会所自ら俵物の独占集荷に当たること、また、俵物請方商人の長崎俵物会所を廃止すると共に、長崎会所内に俵物役所を設置する旨を打ち出したのである。」（徳永〔2〕 p.104）「煎海鼠・干鮑・鱧鱈・昆布とも長崎会所直買入」とし、脇売り、密売買の取締りを厳しくした。

だが、薩摩藩はいっこうに止める気はない。やめられなかったのである。幕府にとってのみならず薩摩藩にとっても、松前産の俵物や昆布は、中国への輸出品としてそれほど重要な存在であった。利益が大きかったのである。昆布はとりわけ中国で珍重された。

昆布が、中国でなぜ必要とされたのか。中国の内陸部に特有な風土病（ヨード不足から甲状腺が肥大し瘤になる）対策に欠かせなかったという。昆布にはヨウ素が豊富に含まれる。中国では昆布は食べ物と言うよりは薬であった。薬屋で売っていたのだという。

「内陸に都が続いた中国では、海産物が貴重品であり、自然条件として昆布が育成しない土地柄、古くは渤海、そして朝鮮や日本から貢ぎ物として伝わったと考えられます。清の時代（日本では江戸時代）からは長崎や琉球を経由して日本の昆布が大量に輸入されました。」〔7〕2. 「昆布の歴史」編 11/13)

「昆布は対清貿易の中心でした。周益湘『道光（1821）以後中琉貿易的統計』によると朝貢船の積荷の86%が昆布で、多いときには94%もあったそうです。」〔7〕2. 「昆布の歴史」編 11/13)

2) 借財五百万両と調所広郷笑左衛門

江戸時代の後期、薩摩の情況に大きな変化が現れる。文政10年（1827）、薩摩藩の財政逼迫は極まり、借財は五百万両に達したという。借財が急激に増えたのである。第九代藩主島津重豪の権勢が続いた時代である。薩摩藩に特有な理由が三つある。第一は、将軍家への輿入れと将軍家との交際費用が膨大なものになったことである。重豪の娘茂姫が十一代将軍徳川家斉の正室となった。第二は、当時の薩摩藩には三侯（3人の藩主）がいるといわれた。高輪邸の大隠居重豪、白金邸の隠居斉宣、芝本邸の斉興である。それぞれに諸侯並の経費を必要とした。しかも、世嗣斉彬も江戸詰めであった。第三は、重豪が自らの子供の諸侯への養子縁組（藩主養嗣）や輿入れを積極的に実践したことである。それぞれが物入りなのである。この三つの要因で、表向きには薩摩藩の威光が天下に輝いたが、財政負担は藩の能力をはるかに超え、藩財政は悪化の一途をたどっていった。（徳永〔2〕p.136）すべては、藩主のなせるわざである。

重豪は、調所広郷（ずしょひろさと）笑左衛門を抜擢しこの大借金の解決を委ねた。（調所は重豪が亡くなった後、藩主斉興の時代家老にまで出世する。）重豪は調所に三つの目標を申し付けた。「天保2年（1831）から11年までの間に五十万両の積立金を作ること、平時また非常時の手当てをなるべく蓄えること、そして、借財した証文を取り返すこと。」命令する方は簡単だが、任される方は容易ではない。二人の隠居と藩主の経費は反発が強く削れない。収入を増やすしかない。（大明寺〔1〕p.28）滅茶苦茶な無理難題である。

調所はこの五百万両の借金の証文を取り返すのに、また滅茶苦茶な方法を使った。天保6年（1835）、大坂の銀主（金を貸している商人）たちの前で、調所は、藩の財政改革も進みつつあり、借金の返済に今後努めるつもりだと前置きし、「ついては、古い証文を新しく認め替えて返済に努めたいので古い証文を一時お返しくくださらんか」と頭を下げて申し出る。銀主たちは無理だといったん抵抗するが、今までは返そうといわなかったのに、返すと言い出したのを評価して、銀主たちは「ここに証文をお貸しもうそう。新しい証文に認め替えてください」と渡してしまう。調所は同じことを江戸でも申し出る。銀主としては、江戸より大阪の方が大きい。

大坂の銀主が信用しているなら江戸の銀主も薩摩を信用し、古い証文を差し出した。調所は証文の内容をすべて克明に記録した上で、証文を返さずすべて中庭で焼き捨ててしまう。そして銀主たちの前にあらためて出てきた返済計画は、「二百五十カ年賦無利子償還」であった。千両借りていたら、年四両の返済で済む。返さないとは言っていない。刀を持つ権力者の居りである。大坂は大混乱に陥り、倒産者が続出した。(大明寺 [1] pp.43-50)

文政10年(1827)調所の財政改革が始まる。いかに利益をうみ、蓄えるかという課題である。債務の返済の荷が軽くなれば蓄財も進む。その柱は二つある。一つは、黒砂糖の販売(専売制度)、もう一つが、琉球口貿易(唐物の密貿易)であった。

3) 黒砂糖専売制

薩摩藩自身の重要な特産品は奄美諸島の黒砂糖であった。奄美への黒砂糖の伝来は元禄時代初期だといわれる。(大明寺 [1] pp.56-57) 相対的に市場価値の高い産物なので薩摩藩は格別に力を入れた。つまり、黒砂糖を薩摩藩の専売制にしたのである。「1788年頃、薩摩の黒糖を大坂で昆布に換え、昆布を琉球で唐物に換え、唐物を長崎・北陸で金に換える商法が始まっていました。」([7]「昆布の歴史」編 11/13) この頃、昆布を大坂に運んだのは北前船である。敦賀経由あるいは瀬戸内経由で運んだものと思われる。北前船の通常ルートである。

調所は大坂の相場を調査して、黒砂糖と唐物の販売が、利益が上がることを理解していた。黒砂糖の専売制は一層強化された。奄美大島、徳之島、喜界島での三島砂糖惣買入制を実施した。その結果、藩による奄美領民に対する収奪は極限にまで及ぶことになる。

「住民による売買を禁止して、違反者は死刑、加担したものは遠島の刑に処した。増産のために、稲作用の水田を黍畑にかえた。十五歳から六十歳までの男性を作用夫とし、女性を半人前として黍作耕地を割り当てた。冬に地拵え、正月に黍の植え付けをさせ、黍の栽培に従事させた。監督の黍横目は厳しく、島人に息つく暇も与えなかった。黍の切り株が高ければ、札をつけ晒し者にし、黒砂糖をなめただけで鞭打、黒砂糖の出来高が悪いと首枷や足枷の刑を与えた。黍の生育状態を役人が視察して製糖量を予測、島人が税として収める黒糖の量を決めた。」(大明寺 [1] pp.64-65) 奴隷労働以外のなものでもない。

「藩が購入する黒糖価格は、黒糖一斤に対し米三合と低く抑えられていた。大坂では黒糖一斤は米一升二合ほどであったから約四分の一である。しかも代金ではなく現物支給とされたが、これも著しい高値で、鯉節のように大坂相場の九十倍で販売されるものもあった。さらに天保十年には、三島での貨幣流通をいっさい禁じ、「羽書(はがき)」という証書をあたえ、売買・賃貸に流通させた。これほど徹底的に全余剰の収奪をはかったのである。」(原口ほか [3])

pp.216-217) 貨幣経済・商品経済の徹底的な排除であり、価格メカニズムの全否定である。収奪を貫徹するためのシステムである。

「このような努力の結果、改革後の十年間の売上高は、黒砂糖合計一億二千万斤、代銀二百三十五万両になった。改革前の売上高は、百三十六万両六千両だった。この成功の陰には、島人の犠牲が一番大きいのは言うまでもないが、品位改良への努力、密売の取締り、運送代の切り詰めや価格操作の努力などがある。」(大明寺 [1] p.66) 薩摩の領民はただ藩の財政改革のためだけに生かされていた。

4) 藩営商船の建造と海商の出現

専売品(黒砂糖)の取引で利益を出そうというのに、薩摩藩は米も含め、大坂へ搬送する独自の船(手船あるいは地元の有力な海運業者)を当初持たなかった。調所は米の販売で思うような収益が得られないことからこの問題に気づく。他藩から商売にきた船の帰り船に頼っていたのである(たとえば、阿波から藍玉商売に来ていた船の帰り便など)。運賃は安かったが、「他藩船に頼った海運では、大坂で商売する時期や数量を管理することができず、効率化や利益と将来性を見越して藩営商船団所有という決断をしたのである。」(徳永 [2] p.142)

調所は、4艘の船を重富で造船し、藩直営の海運業をスタートさせた。黒糖の産地にちなみ「三島方」と称した。三島方御用船で大坂に送り、同地の仲買仲間に直接販売して大きな収益を上げることができた。流通面での機動力を持ったおかげである。

「大坂への米積船に端を発した海運は、調所広郷の黒砂糖専売制度整備に伴う有益な輸送方法として拡大した。この藩御用船としての雇船の建造を領内各港の商人が担っていった。それまで薩摩藩が全ての貿易を独占したことによって、薩摩藩に豪商は存在しなかったが、ここにいたって船持ち商人(海商)が誕生する契機となったのである。」(徳永 [2] p.143)

「調所広郷は黒糖積船の造船を積極的に奨励した。具体的に新船の建造に特別な貸付をし、その返済についても、・・・上方・奄美間の黒糖運輸に従事させ、五、六年ほどで返済できるよう取り計らう旨の政策を打ち出している。」(徳永 [2] p.99)

「天保(1830~1844)から幕末にかけての活発な海運は、藩の海商への手厚い保護のもとに展開されたものであり、海商の活発な活動が黒糖などの専売制を支え、藩政改革の一翼を担ったとも言えるのである。」(徳永 [2] p.143)

調所広郷が、海運流通の機動力を持たないことに起因する問題点に気づき、その整備にいち早く取り組んだことは、時代の流れから見てきわめて重大な意味を持つてくる。交易・流通面での機敏な機動力を備えるという経済的な意味合いだけではない。三島方御用船は、平時には黒糖運送を行うが、非常時には兵糧・弾薬運送の役割を担うことができたのである。

5) 密貿易の拡大

黒砂糖販売と並んで、もう一つの薩摩藩の利益を生み出したのは唐物の密売買であった。既に述べたように、幕府は薩摩藩の密貿易には勘づいており、幾度となく警告している。しかし、薩摩はいっこうに止める気がなかった。

「調所広郷は將軍家斉の御台所（みだいどころ）の茂姫を最大限利用した。茂姫は重豪の娘であった。少しぐらいの禁制破りは黙認されると踏んでいた。禁制品の取引をする一方で、將軍から長崎会所の担当官まで賄賂を贈り続けた。」お目こぼしをあてにしていたのである。事実、文政8年（1825）には長崎会所の唐商から薩摩を厳しく取り締まるよう嘆願書が出されているが、老中水野忠成は握りつぶして長崎奉行に差し戻した。「十一代將軍家斉の御台所のお里の密貿易を調べることは自らの命を失くするに等しいと思っていた。」（大明寺〔1〕 p.34）

「天保7年（1836）、幕府は唐物抜け荷、俵物密売を厳禁すると命令を出した。狙いは薩摩藩であったが、薩摩は懲りずに、將軍、老中から担当者まで贈り物攻勢を続け、年末には調所が待ち望んでいた24品目にわたる琉球産物の取引の更なる二十年継続の許可を得た。薩摩の運動資金は三千両だったといわれている。」「ところが、薩摩は許可されている以外の唐物をもあらゆる機会に買い求め、これを長崎で多量に売り捌いた。」（大明寺〔1〕 p.54）

薩摩は（調所は）なりふり構わず、唐物の密貿易に手を染めていった。琉球を通じて唐物を輸入するためには、中国への朝貢品として俵物や昆布がどうしても必要であった。これらはすべて蝦夷地松前でしか採れないものであり、幕府の専売品でもある。それをいかにして大量に手に入れるか。昆布の調達ルートの確保は薩摩にとって喫緊の課題であった。

3. 昆布ロード

1) 薩摩船の難破

なりふりかまわぬ薩摩の密貿易は、思わぬ遭難事故から表沙汰になった。

「同年（天保6年（1836））、越後国長岡藩領に漂着した薩摩船から大量の禁制品が見つかり、翌天保7年、新潟と江戸で密売組織が摘発された。老中水野忠邦は御庭番川村修就（かわむらながたか）を新潟に派遣して実態を究明させたが、その報告書『北越秘説』には、『春は薩摩芋、夏よりは白砂糖、氷砂糖之類積参り、下積に薬種・光明朱等おびただしく積み込み候』とある。薬種・光明朱ともに禁制の唐物である。さらに川村は、富山方面から流出した唐物が東北・関東・中部地方にでまわり、新潟でもなお抜荷が続いていると水野に報告している。富山にも売薬商人の中に薩摩組というグループがあり、彼らが北海道から昆布などの俵物を大量に仕入れて薩摩藩へ引き渡していたことは、富山に残された資料から確認されている。売薬商人たちは

見返りに中国製の薬種などを薩摩藩からゆずりうけ販売していたのであろう。」(原口他 [3] p.220)

この引用から想像できるように、富山売薬商と薩摩藩とが結び付く必然性は、昆布と薬種である。薩摩藩は昆布を、売薬商は中国の薬種を、喉から手がでるほどに必要とした。厄介なのは、いずれも幕府の専売品(禁制品)であることである。

2) 昆布と薬種

昆布入手の正規ルートは、大坂である。薩摩藩も黒糖を大坂で売り、大坂で昆布を買っていた。問屋を介して販売・購入するので、昆布を入手するまでに旨味は削られる。入手できる量にも限界がある。だから薩摩は、俵物や昆布を自ら直接松前から仕入れようとしたのである。つまり、密買である。しかし、蝦夷は遠く、日本海は荒れる。直接運ぶにはリスクが大きかった。難破するとたちまち表沙汰になり、何を運んでいるのかが取り調べられる。挙句、密貿易がばれてしまい、お公儀からお咎めを受ける。そのリスクを冒してでも直接手に入れようとしていたのである。できれば、安全確実な方法で、大量に昆布を手に入れたいのが本音である。

一方、売薬商が和漢薬生成の材料に用いる薬種(ジャコウやゴオウなどの動物性生薬)は、中国(清)からの輸入品に依存していた。江戸時代に日本に入ってくる薬種は長崎の出島からいったん大坂の道修町(どしょうまち)に集まり、薬種問屋を通じて全国に流通していた。しかしやたら高価なため、売薬商もまた薬種を安く仕入れる方法を模索していたのだ。([8] 6/12)

3) 売薬商と薩摩藩との結びつき

薩摩藩が琉球口貿易を通じて手に入れる唐物の中に中国の薬種があるというのは、富山売薬商たちには知れ渡っていたはずである。薩摩に行けば、あるいは薩摩と組めば、その入手の可能性もあるというのは自然の発想である。問題なのは、薩摩国の閉鎖性である。その厚い扉をこじ開け、領内での売薬の許可を得るには「お土産」が必要になる。最後の問題は、何をお土産にすべきか、薩摩は何を欲しがっているか、である。

松前からの昆布の廻送能力において北前船が熟達していることは、薩摩も理解している。また、富山やその周辺が北前船の拠点の一つであることも当然承知している。となると、解は一つに絞られてくる。富山売薬商が北前船を使い、昆布を薩摩に届けることである。それも「献上品」としてである。いわば、売薬商の「お土産」である。売薬商はその見返りに中国からの薬種を安く手に入れられるということである。同時に、薩摩藩領内で売薬商売ができれば申し分ない。そうなれば、まさにウィン・ウィンの関係である。

「薩摩組が領内での売薬業務を許可される代償に、献上品・上納金などの負担を余儀なくされるのであるが、実際に藩が要求したのは、北前船による昆布の入手であった。藩は琉球口を介した中国への進貢貿易を経営していたことから、最大の輸出品が昆布であり、その供給者の役割を薩摩組に要求したのである。」(徳永 [2] p.145)

「文政9年(1826)の事実として松浦静山は越前の船主らが松前産昆布の薩摩藩への売り込みに関わっていたと記録している。」(大明寺 [1] p.56) 北前船による薩摩への昆布廻漕はすでに試みられているのである。問題は継続性と信頼関係である。

「同(薩摩)藩が支配する琉球口貿易で海産物は進貢品として最も貴重な存在であった。この海産物とは幕府ご禁制の俵物(煎海鼠・干鮑・鱧鱈)と昆布であり、中でも昆布は数量的にも群を抜いた輸出品であった。特に松前でしか生産されないことを考えると、薩摩藩の昆布調達には難しい問題が多かったと推測される。遠隔地松前での昆布入手・廻漕は不確実であり、「薩摩組」に請け負わせることで、より確実に、しかも薩摩藩が表に立つこともなく、難船の場合にも藩及び藩雇船への影響がない等から、他国船の活用—薩摩組の利用が企図されたものといえる。」(徳永 [2] pp.112-113)

4) 雇船から北前船船主へ

越中売薬商は、当初、自らは荷主として北前船を雇って昆布を運んでいた。だがその後さらに一步踏み込んで自ら北前船主になり昆布を運ぶことになる。コミットの度合いが強まるのである。そこには薩摩からの働きかけがある。

嘉永元年(1848)から、薩摩藩でも製薬方の売薬事業がスタートすることになる。薩摩組は自分たちの営業が再び規制を受けるのではないかと心配する。それに対し、薩摩組が自ら昆布廻漕業を引き受けるべくコミットの度合いを強めれば、その売薬規制を避ける手立てになるだろうとの提案が出る。その提案を受けたのが、薩摩組の責任者、能登屋(密田家)林蔵であり、その提案をしたのが鹿児島下町年寄木村喜兵衛・与平衡親子である。^(注1)

「薩摩組集団は、自らの利益と薩摩藩の要求を融合させながら、最大限の機能を発揮しようとした。しかし、薩摩組が直接に藩権力との交渉をすることはなかった。というのは、藩が薩摩組に対して契約相手になることはなく、藩機構の製薬方支配下におき、製薬方株所有の町年寄に委ねていた。」(徳永 [2] p.145)

つまり、薩摩商人で町年寄の木村が薩摩組と藩との仲介役を果たしていたことになる。薩摩組が廻漕事業に打って出るには新しく船を建造する必要があるが、木村はその費用のため五百両の融資を申し出ている。「薩摩組の商人たちはたびたび営業停止を受けたが、その度に木村喜兵衛が差止解除を藩に交渉し、また時には差止を未然に防ぐために薩摩藩に喜ばれる献上品の提

案も行った。松前産の昆布も、もとは薩摩組が薩摩藩領で営業を認めてもらうために、木村が指示した献上品の一つだった。」〔8〕6/12)

越中売薬商と薩摩藩との間に信頼関係を構築^(注2)していきながら、相互にウィン・ウィンの関係があることを見抜き、その取引をアレンジし、実現させていったのは薩摩の商人であった。あるいは、富山の商人と薩摩の商人との相互の信頼関係・協力関係があればこそ、薩摩での越中売薬が持続可能になったというべきかもしれない。

5) 幕末・明治に向かって

すでに述べた天保六年(1835)の薩摩船の越後国長岡藩領への漂着の一件以来、北海道から新潟・富山などを経て薩摩・琉球へと至る全国規模の密売ルートがすでに構築されていることが明らかになってきた。

「事態を重くみた老中水野忠邦は、薩摩藩に天保十年から琉球口貿易を止めるように命じ、天保十四年には新潟を天領に召し上げ、初代新潟奉行に川村を就任させた。しかし、密貿易がそう簡単に撲滅されるはずもなく、また弘化二年(1845)には水野が失脚して翌年からは琉球口貿易も復活した。結局、幕府は薩摩藩の密貿易を封じ込めることができないまま、幕末の動乱期を迎えてしまったのである。」(原口他〔3〕p.220)^(注3)

薩摩藩は琉球口貿易によって、薩摩—琉球—中国という東アジアの国際的な流通ネットワークを形成していたのであるが、さらに越中売薬を介して国内の北前船航路と結ばれることとなった。つまり、「琉球口貿易と松前口貿易の二つの貿易圏が一つにつながるようになる。北は北海道から薩摩・琉球経由で中国へと、国際的貿易圏が成立したのである。」(徳永〔2〕p.106)

これが「昆布ロード」と呼ばれるものである。このルートの両端は日本にとって「外国」である。松前の北は蝦夷、琉球の先は中国(清)。そこでしか採れない俵物(昆布)と唐物(薬種)とが鎖国中の幕藩体制下で取引されたのである。昆布は最も高く評価される中国に運ばれ、唐物は珍重される国内で売られる。そこに利益の源があった。

本来鎖国とは、幕府が長崎口を通じてその貿易利益を独占するはずのものだが、琉球口が開いているために薩摩と競争になる。結果、薩摩に抜け駆けされてしまう。貿易の主人公の立場を幕府から薩摩が奪ったのである。抜け駆けに成功するには、物流の機動力と相場を見る商才が必要である。機動力は北前船が補い、商才は薩摩の家老が持っていた。

薩摩自身は二重鎖国と呼ばれるくらいに閉鎖的な国である。領内は、商品経済を徹底的に排除した物々交換に近い世界で、水ももらさぬ封建的な収奪が行われている。内は封建制を徹底し、外は「競争的貿易」の利益を享受している。幕藩体制と「競争的貿易」という原理的に異なる仕組みが薩摩で交叉していたのである。矛盾した原理が同居するからには、どこかにその

歪み（妥協）や無理が発生する。つまり、売薬商の藩内への営業認可という妥協であり、俵物（昆布）と唐物との「御禁制の密貿易」という無理となって現れた。建前上、矛盾し、無理なものであるから、その存続はどうしても不安定となる。売薬商の薩摩藩での営業認可は度々「取り止め」になり、密貿易は御公儀（おかみ）からの「お咎め」を繰り返し受けた。そのとんでもない仕組みで薩摩藩の財政は立ち直ったのである。

琉球口貿易で莫大な利益を得た薩摩藩は、財政の立て直しに成功する。その立役者が調所広郷だった。清との密貿易を藩政改革の柱に組み入れ^(注4)、財政立て直しに奔走した。調所の努力により、借財五百万両を処理しただけでなく、五十万両の蓄財という目標も、重豪との約束より年月はかかったが達成したのである。調所は、身分は低く茶坊主上がりだったが、功績が認められ、五十七歳で家老格に昇進し、最後には家老にまで上り詰めた。

外洋を通じて様々な国から船が漂着する環境にあった薩摩藩は、周囲を常に警戒せざるを得ない意識や身構えに自ずとなるのであるが、同時に国内外の動きを注意深く観察し、重要な情報をいち早く読み取る能力にも長けていた。とくに、調所は、大坂の相場の読みに優れた才能を持っていたという。〔8〕6/12)

しかし、嘉永元年（1848）調所は江戸で服毒死する。公には自殺ということになっているが、斉彬に毒をもられた可能性がある。^(注5) 藩改革によってもたらされた様々な犠牲の責任、そして何よりも密貿易の全責任を、彼が独りで引っ被る形で亡くなった。

「薩摩藩は1851年（嘉永4年）に十一代藩主になった島津斉彬（なりあきら）のもと、洋式の機械工場群を数カ所建設する。ガラス、鉄、綿布などのほかに火薬、砲弾、大砲などの武器も製造した「集成館（しゅうせいかん）事業」だ。西洋事情に詳しくあった斉彬が列強の武力を危惧して進めた事業で、集成館で鑄造した大砲が後にイギリスの軍艦に大打撃を与え、倒幕の武器にも用いられた。密貿易で得た利益が結果的に倒幕資金の一助となり、明治維新を迎えることになる。」〔8〕7/12)

昆布ロードはあくまでも幕藩体制下の鎖国時代において意味をもった流通ルートである。開国された明治以降は次第にその意義を失うことになる。

「日本の開国を機に、清国の華僑が昆布集積地の函館に居住し、直接昆布を扱うようになりました。1918年には、昆布の輸出量は21,600トンと函館の輸出金額の7割を占めるまでになっていました。1920年以降は、中国国内の混乱などで相場が暴落し、大打撃を被った昆布取引商の華僑は函館を去り、取引市場は根室や上海に分散され、1941年の戦時体制により中国への昆布ロードは終焉を迎えました。」〔9〕北前船と昆布ロード)

現代、中国では昆布の供給は国内の養殖によって支えられているという。

<エピソード>

富山と昆布との歴史的なつながりは、江戸時代、売薬商が大量の昆布を北前船に載せて薩摩まで運んだことに由来するとわかった。富山が流通経路の要でもあり、昆布の荷主でもあれば、当然一般の人々もその入手は容易であったと思われる。手に入りやすければ、消費も増えるだろう。残る問題は古くから昆布が食文化に根付いている点である。

この謎を解くヒントは、「真宗王国」と呼ばれる富山の特徴にある。

「富山で昆布がだしとして用いられるのは、古くから仏教信仰が盛んで、富山が真宗王国（真宗＝浄土真宗）と呼ばれていることと深く関係している。昔から、先祖の命日をしのぶ精進日に出される精進料理は、魚肉類のだしを用いない戒めがあり、代わりに昆布がだしとして用いられていたのである。」

「このように各地で異なる食文化を形成するような食品は珍しい。富山では昆布をだしや料理素材に幅広く使い、昆布巻きや昆布締め、とろろ、昆布かまぼこなど、昆布料理や加工品が豊富である。昆布締めなどを含む「魚介の漬物」の支出金額が20年連続一位であることもそこに起因するのではないだろうか。」

「遠い北海道の地から運ばれてきた昆布が、全国各地で培われてきた文化によって様々に食されている。富山でも昆布を食べる独自の調理法が生み出されており、その習慣が根強く残っているため、現在でも需要が多いと考えられる。」（[10] 4~5/10）

高岡の昆布屋を訪れたとき、羅臼昆布しかないというほどの偏りであった。それにもやはり理由があった。

「明治の頃、富山県から全国各地へ開拓を求めて移住する人や出稼ぎに行く人が増加し、その中でも北海道へ行く人は多かった。北海道移住者のなかには、昆布を含めた漁業に従事する人もおり、昆布の産地として有名な羅臼町の町民の7~8割が富山県出身者だったという。それらの人々が地元にいる家族や親戚に昆布を送るなどの交流が生まれ、次第に富山県民の食生活に浸透していった。現在においても羅臼昆布は富山県民にとっても人気があり、その出荷先は北陸地方や関西地方が多く、なかでも北陸地方は富山県が多いという。」（同上）

高岡の昆布屋になぜ羅臼昆布しかなかったのか、これで納得した。

注

- (注1) 密田家が以前から所有した弁財船の中に「長者丸」という船があったという。1838年4月に岩瀬を出港し、9～10月函館で昆布を500～600石積み、いつもの西廻り航路でなく東回りを選び、11月金華山沖で嵐にあい漂流する。翌1839年4月にアメリカの捕鯨船に救われ、ハワイ、カムチャッカ、オホーツク、アラスカを経て、1843年ロシア船によって択捉島に送られ、松前に帰ってきたと言われている。長者丸の目指したのはもちろん薩摩であった。〔9〕北前船と昆布ロード
- (注2) 調所広郷の逝去を薩摩組にいち早く連絡したのも木村であった。(徳永〔2〕pp.146-147)
- (注3) 新潟を天領として召し上げたのは、天保の改革の上知令で唯一実現したものである。
- (注4) 薩摩藩の蓄財の柱はもう一つあるといわれる。偽金作りである。しかし、本稿では、触れない。詳しくは、大明寺〔1〕ならびに徳永〔2〕の3章3節を参照されたい。
- (注5) 嘉永元年(1848)12月の初旬、調所が江戸城に赴いた際、老中阿部正弘から密貿易と琉球防備の手抜きについて叱責を受ける。顔を合わせず、伝言の形であった。その対処に調所が悩む頃、江戸芝の藩邸にいた島津斉彬から、慰労のため12月18日夜、茶会でもてなしたいとの申し出があった。二人だけの茶会の席で斉彬は濃茶にとりかぶとを練り込んだという。斉彬と久光との間にあった次期藩主の指名争い(権力闘争)に巻き込まれたというもつばらの噂であった。江戸城での安倍の叱責は、斉彬の密告にもとづいていたという。二人は共謀していたのである。(大明寺〔1〕6～8章)

文献・資料

- 〔1〕大明寺岩人『斉彬に消された男』南方新社2006年
- 〔2〕徳永和喜『海洋国家薩摩』南方新社2011年
- 〔3〕原口泉、日隈正守、松尾千歳、皆村武一『鹿児島県の歴史』山川出版社 2011年
- 〔4〕鳴海章『密命売薬商』集英社文庫2017年
- 〔5〕廣貫堂ホームページ・廣貫堂のあゆみ
- 〔6〕富山市民俗民芸村ホームページ 売薬資料館
- 〔7〕昆布館ホームページ 昆布の豆知識 2.「昆布の歴史」編、3.「世界の昆布」編
- 〔8〕「鹿児島市西郷南洲顕彰館 徳永和喜館長の話」、『水の文化』54号7/12 ミツカン水野文化センター
- 〔9〕四十物昆布情報館ホームページ 北前船と昆布ロード
- 〔10〕統計調査ライブラリー家計調査富山県「家計調査結果から見る富山の食文化(1) ―こんぶ、米、清酒の消費について背景を探る―(2009年6月号)4-5/10